

魔術

芥川龍之介

ある時雨の降る晩のことです。私を乗せた人力車は、何度も大森界限の険しい坂を上ったり下りたりして、やっと竹やぶに囲まれた、小さな西洋館の前に梶棒を下ろしました。もうねずみ色のペンキの剥げかかった、狭苦しい玄関には、車夫の出したちょうちんの明かりで見ると、インド人マティラム・ミスラと日本字で書いた、これだけは新しい、瀬戸物の標札がかかっています。

マティラム・ミスラ君といえば、もう皆さんの中にも、ご存じの方が少なくないかもしれません。ミスラ君は長年インドの独立を図っているカルカタ生まれの愛国者で、同時にまたハッサン・カンという名高い婆羅門の秘法を学んだ、年の若い魔術の大家なのです。私はちょうど一月ばかり以前から、ある友人の紹介でミスラ君と交際していましたが、政治経済の問題などはいろいろ議論したことがあっても、肝心の魔術を使うときには、まだ一度も居合わせたことがありません。そこで今夜は前もって、魔術を使ってみせてくれるように、手紙で頼んでおいてから、当時ミスラ君の住んでいた、寂しい大森の町外れまで、人力車を急がせてきたのです。

私は雨にぬれながら、おぼつかない車夫のちょうちんの明かりを頼りにその標札の下にある呼び鈴のボタンを押しました。するとまもなく戸が開いて、玄関へ顔を出したのは、ミスラ君の世話をしている、背の低い日本人のおばあさんです。

「ミスラ君はおいでですか。」
「いらっしやいます。先ほどからあなた様をお待ちかねでございました。」
おばあさんは愛想よくこう言いながら、すぐその玄関のつきあたりにある、ミスラ君の部屋へ私を案内しました。

「今晚は、雨の降るのによくおいででした。」
色の真っ黒な、目の大きい、柔らかな口ひげのあるミスラ君は、テーブルの上にある石油ランプの芯をねじりながら、元氣よく私に挨拶しました。

「いや、あなたの魔術さえ拝見できれば、雨くらはいなんともありません。」
私は椅子に腰掛けてから、薄暗い石油ランプの光に照らされた、陰気な部屋の中を見回しました。

ミスラ君の部屋は質素な西洋間で、まん中にテーブルが一つ、壁際に手ごろな書棚が一つ、それから窓の前に机が一つ——他にはただ我々の腰を掛ける、椅子が並んでいるだけです。しかもその椅子や机が、みんな古ぼけたものばかりで、縁へ赤く花模様を織り出した、派手なテーブル掛けてさえ、今にもずたずたに裂けるかと思うほど、糸目があらわになっていました。

私たちは挨拶をすませたから、しばらくは外の竹やぶに降る雨の音を聞くともなく聞いていましたが、やがてまたあの召し使いのおばあさんが、紅茶の道具を持って入ってくると、ミスラ君は葉巻の箱の蓋を開けて、

「どうぞ。一本。」と勧めてくれました。
「ありがとうございます。」

1 【大森】東京都大田区の地名。高級住宅地の一つとされた。

4 【マティラム・ミスラ】東京に住むインド人の青年。バラモン教徒の子でハッサン・カンの信者。

4 【瀬戸物】土を焼いてつくった容器。陶磁器。

7 【ハッサン・カン】十九世紀末のインドの哲学者・魔法使い・高位の僧。

8 【婆羅門】バラモン教のこと。古代インドの宗教。

私は遠慮なく葉巻を一本取って、マッチの火を移しながら、

「たしかあなたのお使いになる精霊は、ジンとかいう名前でしたね。するとこれから私が拝見する魔術というのも、そのジンの力を借りてなさるのですか。」

ミスラ君は自分も葉巻へ火をつけると、にやにや笑いながら、匂いのよい煙を吐いて、

「ジンなどという精霊があると思っただけ、もう何百年も昔のことです。アラビヤ夜話の時代のことでもいいでしょうか。私がハッサン・カンから学んだ魔術は、あなたでも使おうと思えば使えますよ。たかが進歩した催眠術にすぎないのですから。——ご覧なさい。この手をただ、こうしさえすればよいのです。」

ミスラ君は手を上げて、二、三度私の目の前へ三角形のようなものを描きましたが、やがてその手をテエブルの上へやると、縁へ赤く織り出した模様の花をつまみ上げました。私はびっくりして、思わず椅子をずり寄せながら、よくよくその花を眺めました。確かにそれは今の今まで、テエブル掛けの中にあつた花模様の一つにちがひありません。が、ミスラ君がその花を私の鼻の先へ持つてくると、ちょうど麝香か何かのように重苦しい匂いさえするのです。私はあまりの不思議さに、何度も感嘆の声を漏らしますと、ミスラ君はやはり微笑したまま、またむぞうさにその花をテエブル掛けの上へ落としました。もちろん落とすともとのとおり花は織り出した模様になって、つまみ上げることどころか、花びら一つ自由には動かさなくなってしまうのです。

「どうです。わけはないでしょう。今度は、このランプをご覧なさい。」

ミスラ君はこう言いながら、ちよいとテエブルの上のランプを置き直しましたが、その拍子にどういいうわけか、ランプはまるで独楽のように、ぐるぐる回り始めました。それもちゃんと

一所に止まったまま、ホヤを心棒のようにして、勢いよくめぐり始めたのです。はじめのうち

は私も胆をつぶして、万一火事にでもなつては大変だと、何度もひやひやしましたが、ミスラ君は静かに紅茶を飲みながら、いっこう騒ぐ様子もありません。そこで私もしまいに、すっかり度胸がすわってしまって、だんだん早くなるランプの運動を、目も離さず眺めていました。

また実際ランプのかさが風を起こして回る中に、黄色い炎がたった一つ、瞬きもせずにともっているのは、なんともいえず美しい、不思議な見物だったのです。が、そのうちにランプの回るのが、いよいよ速やかになっていって、とうとう回っているとは見えないほど、澄みわたつたと思ひますと、いつのまにか、前のようにホヤ一つゆがんだ気色もなく、テエブルの上にならなくなってしまいました。

「驚きましたか。こんなことはほんの子供だましですよ。それともあなたがお望みなら、もう一つ何かご覧にいれましょう。」

ミスラ君は後ろを振り返って、壁際の書棚を眺めました。やがてその方へ手をさし伸ばして、招くように指を動かすと、今度は書棚に並んでいた書物が一冊ずつ動きだして、自然にテエブルの上まで飛んできました。そのまた飛び方が両方へ表紙を開いて、夏の夕方に飛び交うように、ひらひらと宙へ舞い上がるのです。私は葉巻を口へくわえたまま、あっけにとられて見ていましたが、書物は薄暗いランプの光の中に何冊も自由に飛び回って、いちいち行儀よくテエブルの上へピラミッド形に積み上がりました。しかも残らずこちらへ移ってしまったと思つと、すぐに最初来たのから動きだして、もとの書棚へ順々に飛び返っていくじゃありませんか。

が、なかでもいちばんおもしろかったのは、薄い仮綴じの書物が一冊、やはり翼のように表

②

2 【ジン】魔神の名前。ハッサン・カンの信者にだけその声が聞こえるとされる。
5 【アラビヤ夜話】アラビアを中心とする地域の大昔の物語集。ジンが登場する。
13 【麝香】ジャコウジカから採集してつくられる匂いの強い香料。

1 【ホヤ】ランプなどの火を覆うガラスの筒。
20 【仮綴じ】糸や針金で書物などの中身を綴じ、表紙を簡単に取り付けたもの。

紙を開いて、ふわりと空へ上がりましたが、しばらくテエブルの上で輪を描いてから、急にペー
ジをざわつかせると、逆落として私の膝へさっと下りてきたことです。どうしたのかと思って手
にとって見ると、これは私が一週間ばかり前にミスラ君へ貸した覚えがある、フランスの新しい
小説でした。

「長々ご本をありがとうございます。」

ミスラ君はまだ微笑を含んだ声で、こう私に礼を言いました。もちろんそのときはもう多く
の書物が、みんなテエブルの上から書棚の中へ舞い戻ってしまっていたのです。私は夢からさめ
たような心持ちで、暫時は挨拶さえできませんでしたが、そのうちにさっきミスラ君の言った、
「私の魔術などというものは、あなたでも使おうと思えば使えるのです。」という言葉を出
しましたから、

「いや、かねがね評判は伺っていましたが、あなたのお使いなさる魔術が、これほど不思議な
ものだろうとは、実際、思いもありませんでした。ところで私のような人間にも、使って使えな
いことのないというのは、ご冗談ではないのですか。」

「使えますとも。誰にでもぞうさなく使えます。ただ——。」と言いかけてミスラ君はじっと私
の顔を眺めながら、いつになく真面目な口調になって、

「ただ、欲のある人間には使えません。ハッサン・カンの魔術を習おうと思ったら、まず欲を
捨てることです。あなたにはそれができますか。」

「できるつもりです。」

私はこう答えましたが、なんとなく不安な気もしたので、すぐにまたあとから言葉を添えまし
た。

「魔術さえ教えていただければ。」

それでもミスラ君は疑わしそうな目つきを見せましたが、さすがにこのうえ念を押すのはぶし
つけだとも思ったのでしよう。やがて大様にうなずきながら、

「では教えてあげましょう。が、いくらぞうさなく使えるところ、習うのには暇もかかりま
すから、今夜は私のところへお泊まりなさい。」

「どうもいろいろ恐れ入ります。」

私は魔術を教えてもらううれしさに、何度もミスラ君へお礼を言いました。が、ミスラ君は
そんなことに頓着する気色もなく、静かに椅子から立ち上がると、

「オバアサン。オバアサン。今夜ハオお客様ガオ泊マリニナルカラ、寢床ノ仕度ヲシテオイテオク
レ。」

私は胸を躍らしながら、葉巻の灰をはたくのも忘れて、まともに石油ランプの光を浴びた、親
切そうなミスラ君の顔を思わずじっと見上げました。

私がミスラ君に魔術を教わってから、一月ばかりたったのちのことです。これもやはりぎあ
ざあ雨の降る晩でしたが、私は銀座のある倶楽部の一室で、五、六人の友人と、暖炉の前へ陣取
りながら、気軽な雑談にふけていました。

なにしろここは東京の中心ですから、窓の外に降る雨足も、しっきりなく往来する自動車や馬
車の屋根をぬらすせい、あの、大森の竹やぶにしづくような、もの寂しい音は聞こえません。

もちろん窓の内の陽気なことも、明るい電灯の光といい、大きなモロッコ皮の椅子といい、あ
るいはまた滑らかに光っている寄せ木細工の床といい、見るから精霊でも出てきそうな、ミスラ

14 【銀座】東京都中央区の地名。

14 【倶楽部】会員制の洋風の酒場。

18 【モロッコ皮】モロッコ特産で、ヤギの皮をなめした質のよい皮。

19 【寄せ木細工】材質や色、木目の異なった木片を組み合わせて、美しい形や模様にした細工。

君の部屋などとは、まるで比べものにはならないのです。

私たちは葉巻の煙の中に、しばらくは狼の話だの競馬の話だのをしていました。そのうちに一人の友人が、吸いさしの葉巻を暖炉の中に放り込んで、私の方へ振り向きながら、

「君は近頃魔術を使うという評判だが、どうだい。今夜はひとつ僕たちの前で使ってみせてくれないか。」

「いいとも。」

私は椅子の背に頭をもたせたまま、さも魔術の名人らしく、横柄にこう答えました。

「じゃ、なんでも君に一任するから、世間の手品師などにはできそうもない、不思議な術を使ってみせてくたまえ。」

友人たちは皆賛成だとみえて、てんでに椅子をすり寄せながら、促すように私の方を眺めました。そこで私はおもむろに立ち上がって、

「よく見ていてくれたまえよ。僕の使う魔術には、種も仕掛けもないのだから。」

私はこう言いながら、両手のカフスをまくり上げて、暖炉の中に燃え盛っている石炭を、むぞうさにてのひらの上へすくい上げました。私を囲んでいた友人たちは、これだけでも、もう荒胆をひしがれたのでしょう。皆顔を見合わせながらうっかりそばへ寄ってやけどでもしては大変だと、気味悪そうに尻ごみさえし始めるのです。

そこで私のほうはいよいよ落ち着き払って、そのてのひらの上の石炭の火を、しばらく一回の目の前へつきつけてから、今度はそれを勢いよく寄せ木細工の床へまき散らしました。そのとたんと、窓の外に降る雨の音を圧して、もう一つ変わった雨の音がにわか床の上から起こったのは。というのは真っ赤な石炭の火が、私のてのひらを離れると同時に、無数の美しい金貨に

なって、雨のように床の上へこぼれ飛んだからなのです。

友人たちは皆夢でも見ているように、呆然と喝采するのさえも忘れていました。

「まずちょいとこんなものさ。」

私は得意の微笑を浮かべながら、静かにまたもとの椅子に腰を降ろしました。

「こりや皆本当の金貨かい。」

あっけにとられていた友人の一人が、ようやくこう私に尋ねたのは、それから五分ばかりたったあとのことです。

「本当の金貨さ。うそだと思ったら、手にとって見たまえ。」

「まさかやけどをするようなことはあるまいね。」

友人の一人は恐る恐る、床の上の金貨を手にとって見ましたが、

「なるほどこりや本当の金貨だ。おい、給仕、ほうきとちり取りとを持ってきて、これを皆掃き集めてくれ。」

給仕はすぐに言いつけられたとおり、床の上の金貨を掃き集めて、うずたかくそばのテエブルへ盛り上げました。友人たちは皆そのテエブルの周りを囲みながら、

「ざっと二十万円くらいはありそうだね。」

「いや、もっとありそうだ。華奢なテエブルだった日には、潰れてしまいくらいあるじゃないか。」

「なにしろ大した魔術を習ったものだ。石炭の火がすぐに金貨になるのだから。」

「これじゃ一週間とたたないうちに、岩崎や三井にも負けられないような金満家になってしまいうらう。」などと、口々に私の魔術を褒めそやしました。が、私はやはり椅子に寄り掛かったまま、

13 【カフス】ワイシャツの袖口。

14 【荒肝をひしがれる】並たいていのごときは驚かぬいのを、「あっ。」と驚かされる。

11 【給仕】付き添って食事などの世話をする係の人。

19 【岩崎や三井】明治時代から第二次世界大戦後まで続いた二大財閥の名前。
【金満家】大金持ち。

悠然と葉巻の煙を吐いて、

「いや、僕の魔術というやつは、いったん欲心を起こしたら、二度と使うことができないのだ。だからこの金貨にしても、君たちが見てしまったうえは、すぐにまた元の暖炉の中へ放り込んでしまおうと思っている。」

友人たちは私の言葉を聞くと、言い合わせたように、反対し始めました。これだけの大金を元の石炭にしてしまうのは、もったいない話だと言うのです。が、私はミスラ君に約束した手前もありますから、どうしても暖炉に放り込むと、強情に友人たちと争いました。すると、その友人たちの中でも、いちばん狡猾だという評判のあるのが、鼻の先で、せせら笑いながら、

「君はこの金貨を元の石炭にしようと言う。僕たちはまたしたくないと言う。それじゃいつまでたったところで、議論が干ないのはあたりまえだろう。そこで僕が思うには、この金貨を元手にして、君が僕たちとカルタをするのだ。そうしてもし君が勝ったなら、石炭にするのも何にするとも、自由に君が始末するがいい。が、もし僕たちが勝ったなら、金貨のまま僕たちへ渡したまえ。そうすればお互いの申し分も立って、しごく満足だろうじゃないか。」

それでも私はまだ首を振って、容易にその申し出しに賛成しようとはしませんでした。ところがその友人は、いよいよ嘲るような笑みを浮かべながら、私とテエブルの上の金貨とをずるそうにじろじろ見比べて、

「君が僕たちとカルタをしないのは、つまりその金貨を僕たちに取られたくないと思うからだろう。それなら魔術を使うために、欲心を捨てたとか何とかいう、せっかくの君の決心も怪しくなってくるわけじゃないか。」

「いや、なにも僕は、この金貨が惜しいから石炭にするのじゃない。」

「それならカルタをやりたまえな。」

何度もこういう押し問答を繰り返したあとで、とうとう私はその友人の言葉どおり、テエブルの上の金貨を元手に、どうしてもカルタを闘わせなければならぬに立ち至りました。もちろん友人たちは皆大喜びで、すぐにランプをひと組取り寄せると、部屋の片隅にあるカルタ机を囲みながら、まだためらいがちな私を早く早くとせき立てるのです。

ですから私もしかたがなく、しばらくの間は友人たちを相手に、いやいやカルタをしていました。が、どういうものか、その夜に限って、ふだんは格別カルタ上手でもない私が、うそのようにどんどん勝つのです。するとまた妙なもので、はじめは気のりもしなかったのが、だんだんおもしろくなり始めて、もの十分とたたないうちに、いつか私は一切を忘れて、熱心にカルタを引き始めました。

友人たちは、もとより私から、あの金貨を残らずまき上げるつもりで、わざわざカルタを始めたのですから、こうなると皆あせりにあせて、ほとんど血相さえ変わるかと思うほど、夢中になって勝負を争いだしました。が、いくら友人たちが躍起となっても、私は一度も負けないばかりか、とうとうしまいに、あの金貨とほぼ同じほどの金高だけ、私のほうが勝ってしまったじゃありませんか。するときっきの人の悪い友人が、まるで、気違いのような勢いで、私の前に、札をつきつけながら、

「さあ、引きたまえ。僕は僕の財産をすっかり賭ける。地面も、家作も、馬も、自動車も、一つ残らず賭けてしまう。そのかわり君はあの金貨の他に、今まで君が勝った金をことごとく賭けるのだ。さあ、引きたまえ。」

私はこの刹那に欲が出ました。テエブルの上に積んである、山のような金貨ばかりか、せっか

10 【干ない】終わらない。

11 【カルタ】小さな長方形の紙の札に、絵や文字をかけたもの。いろはがるたやトランプなどがある。

14 【金高】金額。

15 【気違い】考えや行動が正常でない人。現在では差別語として使用が避けられる。

17 【家作】穏やかなさま。貸し家。

く私が勝った金さえ、今度運悪く負けたが最後、皆相手の友人に取られてしまわなければなりません。のみならずこの勝負に勝ちさえすれば、私は向こうの全財産を一度に手へ入れることができるのです。こんなときに使わなければどこに魔術などを教わった、苦心のかけがあるのでしょうか。そう思うと私は矢も盾もたまらなくなって、そっと魔術を使いながら、決闘でもするような勢いで、

「よろしい。まず君から引きたまえ。」

「九。」

「王様。」

私は勝ち誇った声をあげながら、真っ青になった相手の目の前へ、引き当てた札を出してみせました。すると不思議にもそのカルタの王様が、まるで魂が入ったように、冠をかぶった頭をもたげて、ひょいと札の外へ体を出すと、行儀よく剣を持ったまま、にやりと気味の悪い微笑を浮かべて、

「オバアサン。オバアサン。オお客様ハオ帰りニナルソウダカラ、寢床ノ支度ハシナクテモヨイヨ。」

と、聞き覚えのある声で言うのです。と思うと、どういうわけか、窓の外に降る雨足までが、急にまたあの太森の竹やぶにしづくような、寂しいぎんぎ降りの音を立てました。

ふと気がついて辺りを見回すと、私はまだ薄暗い石油ランプの光を浴びながら、まるであのカルタの王様のような微笑を浮かべているミスラ君と、向かい合って座っていたのです。

私が指の間に挟んだ葉巻の灰さえ、やはり落ちずにたまっているところを見ても、私が一月ばかりたったと思ったのは、ほんの二、三分の間に見た、夢だったのにちがいません。けれど

もその二、三分の短い間に、私がハッサン・カンの魔術の秘法を習う資格のない人間だということは、私自身にもミスラ君にも、明らかにってしまったのです。私は恥ずかしそうに頭を下げたまま、しばらくは口もきけませんでした。

「私の魔術を使おうと思ったら、まず欲を捨てなければなりません。あなたはそれだけの修業ができていないのです。」

ミスラ君は気の毒そうな目つきをしながら、縁へ赤く花模様を織り出したテーブル掛けの上に肘をつけて、静かにこう私をたしなめました。

〈出典 『芥川龍之介全集3』（筑摩書房、一九八六年）〉

【著者】芥川龍之介（あくたがわりゅうのすけ）

一八九二（明治二五）年—一九二七（昭和二）年

作家。東京都の生まれ。

【著書】『羅生門』『蜘蛛の糸』『蜜柑』など